

## まえがき

世界は短期的に見れば混沌としている。いまや、世界と日本はこの混沌から抜け出せず、閉塞感に覆われているように見える。だが、人類の歴史を見れば、一本の社会進化の流れが貫いている。短期的混沌の中で次々と起る社会問題に対処療法をほどこすことも必要だが、社会進化の流れに添った根治療法を施すことがなければ、対処療法も生きてこない。

朝日新聞が二〇一一年二月中旬から三月中旬にかけて実施した世論調査がある。そこでは「いまの政治は社会の将来像と道筋を示していない」と回答した者が九一％に達した。現在の混沌と閉塞感のなかで、国民は「社会の将来像と道筋」を求めているのである。また、国際世論は、期限付きの核兵器廃絶を求めている。さらに、地球温暖化防止の国際専門家会議であるIPCCは、二〇五〇年までに人類の化石燃料使用によるCO<sub>2</sub>（二酸化炭素）排出を一九九〇年の排出の半分に削減しなければならない、と勧告している。日本に当てはめれば、現在のCO<sub>2</sub>排出のおそらく九〇％を削減しなければならない、殆ど化石燃料を使わずに済まさなければならない。これらの期限付きの全人類的な要請に先進国たる日本は率先して応えなければならない。

つまり、二一世紀初頭のいま、人類は戦争と暴力、圧政と差別、貧困と格差、地域生態系と地球生態系の破壊、地震と津波や異常気象による災害等に直面し、これを克服することが国際社会の課題となっている。この課題に 대응べく、二一世紀に達成すべき人類の目標、目標を達成するため現代社会の診断と処方、目標達成の工程表、目標を達成する原動力、達成された社会の素描、そ

これらの理論的基礎等を明示することを誰かが果たさなければならぬ。それなしには時代の閉塞感  
は水解せず、国民の政治的意思を建設的な方向で統合することはできないだろう。

この本は、このような問題意識に基づいて書かれた「近未来社会論」であり、六〇代半ばをとう  
に過ぎた学者達が、長い人生の間に蓄えた見識に基づいて、「社会の将来像と道筋」を大胆かつ全  
面的に書き綴った、現代社会への問題提起と提案である。

学者が社会を論じる場合、普通は各自が専門に関わる領域について別々に論じる。しかし、この  
本では自然科学者と社会科学者が協力し、日本と世界を丸ごと論じた。このような社会の論じ方は、  
学者が社会に貢献する新しいあり方として、最近では日本学術会議も『日本の展望—学術からの提言  
二〇一〇』の中で推奨している。この本は、この新しい方法を用いて日本と世界の近未来社会を描  
いた、おそらく初めての試みである。「総論」はその内容をまとめたものであり、「各論」は重要なテー  
マについての詳論である。「総論」の「はじめに」を読めば、この本の特徴である発想の独自性と  
斬新さが理解できるであろう。また、「各論」にはそれぞれのテーマについて緻密で鋭い論考が展  
開されており、読者の知的関心を満たしてくれるであろう。

わが国には「為せば成る、為さねば成らぬ、何事も、成らぬは人の為さぬなりけり」という格言  
がある。そして、いつの世も、いずれの地でも、社会改革の実行は若者の仕事である。老人は、そ  
のために必要な知恵を出すことができる。著者たちは、人生の先輩と後輩が力を合わせ、いま日本  
を覆っている閉塞感を打ち破り、二一世紀の新しい世界を切り開くことを切に願っている。この本  
で語られる二一世紀社会論がその一助となれば幸いである。

松川康夫

目次

まえがき——松川康夫 ..... 1

第1部 総論

21世紀社会の設計——松川康夫 ..... 7

はじめに ..... 9

第1章 二二世紀社会と新自由主義 ..... 13

第2章 二二世紀社会の目標 ..... 19

第3章 民主主義の診断と処方 ..... 24

第4章 福祉の診断と処方 ..... 38

第5章 平和の診断と処方 ..... 50

第6章 環境の診断と処方 ..... 65

第7章 経済の健全化 ..... 79

第8章 世界連邦の展望 ..... 83

第9章 二二世紀社会の工程表 ..... 85

第10章 二二世紀社会を実現する力と方法 ..... 95

第11章 二二世紀日本社会の素描 ..... 105  
 おわりに ..... 108

## 第2部 各論

### 平和・公正・平等の世界秩序の確立をめざして——北村 実 ..... 111

第1章 国民国家から脱国民国家へ ..... 113  
 第2章 人類の到達点としての「恒久平和」 ..... 126  
 第3章 戦争の原因をなくさなければ「恒久平和」は実現しない ..... 138  
 結びに代えて ..... 146

### 21世紀における経済システムの変革——鶴田満彦 ..... 149

第1章 経済システムと経済原則 ..... 151  
 第2章 国家独占資本主義からグローバル資本主義へ ..... 159  
 第3章 二〇〇八年恐慌とグローバル資本主義の変容 ..... 170  
 第4章 地球環境の制約 ..... 178  
 第5章 持続可能で公正な経済システムを求めて ..... 184

社会契約論の有効性——伊藤宏之	193
はじめに 課題の設定	195
第1章 イラク訴訟運動と名古屋高裁判決の論理	196
第2章 名古屋高裁判決の歴史的性格	208
第3章 大衆的裁判闘争論	217
第4章 むすびにかえて	225
21世紀の技術を問う——塩谷 光	229
はじめに	231
第1章 二〇世紀における技術の到達点	232
第2章 二二世紀の技術のあり方	245
あとがき——松川康夫	267
資料1 東大確認書	269
資料2 緊急声明「東日本大震災は国づくりの転換を求めている」	274

## はじめに

この論考には、いくつかの新味が盛り込まれている。それがこの論考の「売り」である。読者には、まず全体をザッと読み通した後に、そこに立ち返っていただければ幸いである。

第一の新味は、二一世紀の未来社会を描いたことそれ自体である。科学的社会主義の立場は「未来社会の青写真を描かない」ということのようなのだが、これは事実上の思考停止に他ならない。世論調査が示すように国民は「社会の将来像と道筋」を求めているのである。社会改革を志す者が思考停止にあまんじて良いわけではない。

第二の新味は、未来社会を描いた方法論である。科学的社会主義の方法論は、社会の内部矛盾を明らかにし、その矛盾の展開および止揚として未来社会を描くことである。しかし、この方法による解は殆ど不定である。諸々の条件に応じて諸々の解が生じ、定まらないからである。「未来社会の青写真は描かない」という立場は、おそらくこのことに由来する。ここで採用したのはそれとは異なる方法で、人類が歴史のなかで打ち立てた普遍的価値を抽出し、これを実現する社会を総合的理論政策として設計する、という「合理的設計論」の手法である。この手法によって初めて解を収斂させ、定めることができる。これなしには、二〇五〇年までに人類の化石燃料使用によるCO<sub>2</sub>排出を一九九〇年の半分に削減しなければならぬ、という人類史上はじめての期限付き社会改革の責務を果たすことはできない。

第三の新味は、普遍的価値の実現を社会変革の基軸に据える、という発想それ自体である。この

発想は、人類の理性的営為が人類社会を進展させることを前提としている。要するに、「マルクスか、ヘーゲルか」ではなく、「マルクスも、ヘーゲルも」の立場、すなわち階級闘争と理性的営為の双方を社会発展の契機として認める立場である。

第四の新味は、経済が主ではなく、普遍的価値としての民主・福祉・平和・環境こそが主であり、経済は従なのだ、という当たり前の価値観である。いまの日本の価値観、とりわけ政治における価値観は逆さまであり、恐ろしいほどに卑俗化している。政治とは正義を行なうことだが、既に現実が示す通り、経済を自由にすることは正義ではなく、むしろ不正義となっている。普遍的価値としての民主・福祉・平和・環境を実現すること、そのために経済を制御すること、これこそが現代の正義である。

第五の新味は、民主主義について、政治の分野における民主主義だけでなく、社会生活の分野における民主主義にも光を当てたことである。社会生活の分野における民主主義は、いまの民主主義に関する大方の議論において、殆ど抜け落ちていた。

第六の新味は、社会福祉・社会保障の基本的要素として「完全雇用」「完全就労」そして「ILO（国際労働機構）基準」を掲げたこと、また社会保障の財源捻出策としての累進課税強化の論拠に「不労所得禁止」を掲げたことである。これらも、いまの日本では死語に近い。

第七の新味は、極東の緊張緩和を進展させるために、北東アジア平和友好協力条約を関係六カ国の多国間条約として締結することを最優先課題とするよう、また領土問題に「自然主義」と「共有と共同管理」を導入するよう、かなり踏み込んだ提案をしたことである。核兵器廃絶、軍事同盟の解消、「歴史主義」による領土問題の解決、六カ国協議再開と冷静な話し合いというこれまでの提

案だけでは、速やかな極東の緊張緩和と領土問題解決の展望は見えてこない。

第八の新味は、原発問題とエネルギー問題を巡る大方の議論が定性的な議論にとどまる中で、日本における再生エネルギーの自給力を現状のエネルギー消費のほぼ半分と見積もったこと、そして生活物資やエネルギーを地産地消とし、耐久消費財の使用年数を現状の二倍に定めることなどの社会経済構造の転換を行なえば、国内工業生産と物流とエネルギー消費は半減し、エネルギーは国産で賄えると定量的に判定したことである。省エネのキーとなる「工業生産を縮小する」という構想が容易に普及しないのは、この構想が経済成長至上主義者にとつて受入れ難いだけでなく、工業生産力を資本主義の桎梏から開放することを労働者階級の歴史的使命とみなすマルクス主義者にとつても受入れ難いためかも知れない。

第九の新味は、二〇五〇年に向けた二一世紀社会の工程表を作成したことである。奇想天外と受け止められそうだが、社会を漫然とではなく、意識的かつ計画的に改革しようとすれば、工程表は不可欠である。IPCC（気候変動に関する政府間パネル）が勧告したように、世界は地球温暖化防止のため二〇五〇年までに化石燃料起源のCO<sub>2</sub>排出を一九九〇年基準で半減しなければならなくなった。つまり、歴史的には全く新しい「期限付き」の制約が世界に課せられることになったというわけで、二一世紀の人類は、社会経済構造の改革を工程表に基づいて計画的に実行しなければならなくなったのである。

最後の第一〇の新味は、理性的営為としての社会改革は公教育になじむものであり、労働者教育による労働者の階級的覚醒もさることながら、公教育による国民の知的・倫理的開花こそが二一世紀社会に向けた社会改革の原動力である、としたことである。これも「マルクスか、ヘーゲルか」

ではなく、「マルクスも、ヘーゲルも」の立場に由来するものである。